

やまとの名品 天理図書館



ねずみ そうし えまき
鼠の草子絵巻 別本

1巻 江戸時代初期写
縦28.4cm 横8.17m

室町時代から江戸初期にかけて作られた物語を御伽草子という。江戸中期に『鉢かつぎ』『一寸法師』等二十三種の物語が『御伽文庫』として刊行された事に始まり、これらに類する物語を総称するようになった。平安・鎌倉時代の物語の作者が公家階級に属する者であったのに対し、御伽草子は僧侶、教養のある武家等も加わり、読者も広い階層が対象となった。その内容も多種多様で、「公家物」「宗教物」「武家物」「庶民物」「外国物」「異類物」に大別される。絵巻や奈良絵本といった美しい絵入り写本として伝わるものが多い。『鼠の草子絵巻』は、異類物の

一つ。鼠の「ごんのかみ」は、人間と契る事により、子孫が畜生道から逃れるようにと清水寺の観音に祈願する。その願いは叶い、人間の姫君を花嫁に迎える事となる。しかし、姫君はごんのかみが鼠と知らなかった。やがて事実は露見し、姫君は鼠の館を逃げ出す。寵愛する姫を失ったごんのかみの悲しみは深く、出家して高野山に向い、仏道修行をするとの話。本書は卷子本。巻初と巻末を欠き、婚礼の準備をする調理場から、姫君が逃げ出す前の場面までが残る。料理や盛り付けを

する調理場、祝いの餅つき、行列、出産風景等。絵と書き込まれた文章が一体となり、鼠の館の様子をユーモラスに描く。掲出図は風呂に入るごんのかみ。



画中の煙草や髪型、歌謡から江戸初期に制作されたものと推定される。当時の風俗を知る貴重な資料である。

(天理図書館 西田裕美)